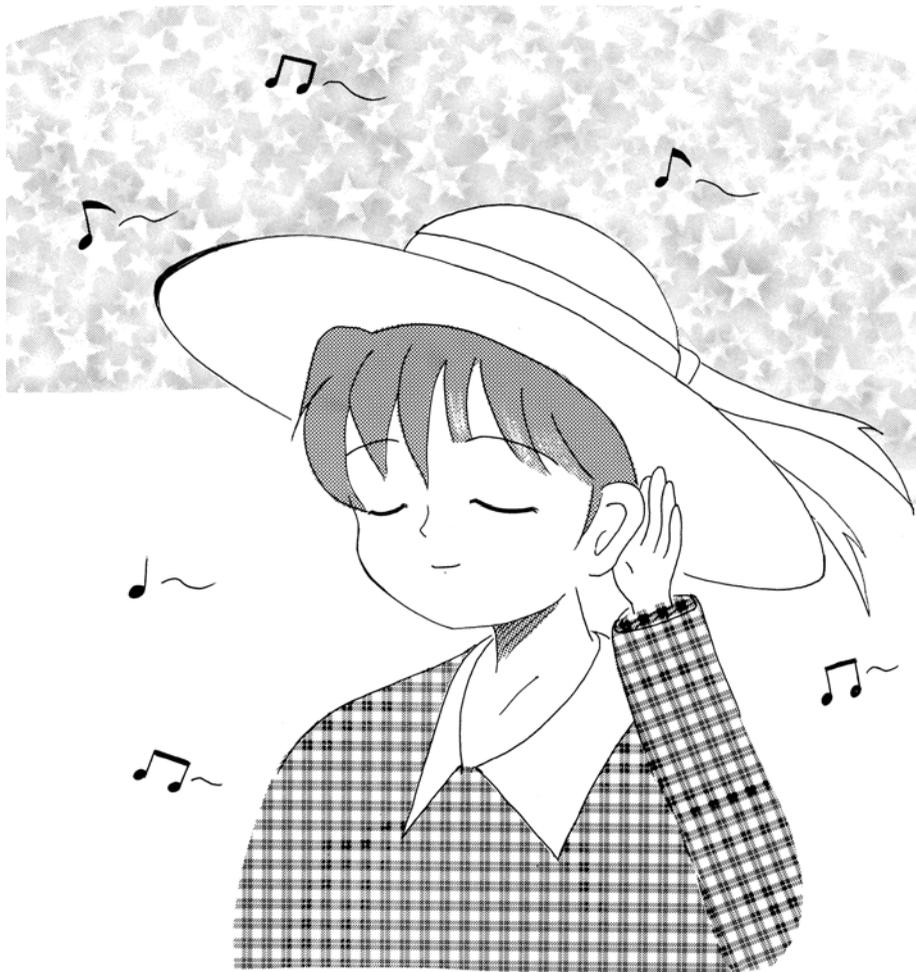


アンサンブル
Ensemble ソラ
Sol La 1



© SUZUKI TOSHIKAZU 2009

2009-02-07

ごあいさつ

Ensemble SolLa (アンサンブル ソラ) の第一回演奏会によろこそ。私たちは、二重唱とピアノを中心としたプログラムで最初のコンサートを開くことにいたしました。ドイツ語のブラームス、フランス語のフォーレ、日本語で寺嶋陸也ほかと、盛りだくさんの内容をコンパクトにまとめました。声のアンサンブルをお楽しみいただければ幸いです。

声のアンサンブルという聞き慣れない言い方を使いました。私たちは、二人以上の歌や歌と楽器など複数の人で演奏するアンサンブルを、もっと広く演奏していきたいと考えています。いちおうクラシック音楽 ヨーロッパ由来のスタイルの芸術音楽 という枠組み内で、重唱、合唱、歌と楽器のアンサンブルなど、できるものは何でも取り組むつもりです。

私たちは、ことばを大切にしていって歌っていくという姿勢を持っています。クラシックの歌でも、最近注目のオペラは、大劇場でマイクも使わずに聴かせるという、人間の生物学的限界に近い発声性能を追求した結果、言葉を伝えるという機能面での障害を来しているのではないのでしょうか。言葉を伝えようと歌っているのかどうかは、たとえ知らない言葉でも、聴く人に確実に伝わるものです。

最期に、イギリスで歌曲の伴奏を多く手がけているピアニスト、グレアム・ジョンソンの言葉から。「3人のテノールがフルスロットルで歌う《オー・ソレ・ミオ》を聞くより、一人のテナーが優しくフォーレの《月の光》を唱うのを聞く方がいいという人々が世の中にまだいるということ、我々は信じ続けなければならない。精神の健全のためにも。」

プログラム

1. ブラームス

- 《4つの二重唱曲》1863 出版
《修道女と騎士》アイヒェンドルフ 詩
《戸の前で》ドイツ古詩
《川は流れる》ゲーテ 詩
《狩人と恋人》ファラーズレーベン 詩

Brahms, Johannes, 1833-1897
Duette für Alt, Bariton und Klavier, op. 28
Die Nonne und der Ritter / Eichendorf
Vor der Tür / Altdeutsch
Es rauschet das Wasser / J. W. von Goethe
Der Jäger und sein Liebchen / Fallersleben

2. フォーレ

- 《ノクターン第3番》1882
《水のほとり》1875 プリュドーム 詩
《ゆりかご》1879 プリュドーム 詩
《金の涙》1896 サマン 詩

Fauré, Gabriel, 1845-1924
Nocturne n°3 Ab op.33-3
Au bord de l'eau / Prudhomme, op.8-1
Les berceaux / Prudhomme, op. 23-1
Pleur d'or / Samain, op. 72

休憩

3. 信長貴富, 1971-

歌曲集《詩人の肖像》より《詩人は辛い》2007 中原中也 詩

4. 三善 晃, 1933-

《抒情小曲集》より《ほおずき》1976 萩原朔太郎 詩

5. 寺嶋 陸也, 1964-

- 《こどもの季節》第1集 2001, 第2集 2002 より
《足》(第2集) 岩城 雄一 詩
《はやくはやく》(第1集) さとう 正みち 詩
《あきのおわり》(第1集) しのお ゆきのり 詩
《ぶらんこ》(第2集) 加藤 直己 詩
《春の足音》(第2集) 道仏 さき子 詩
《おへそからめがでたら》(第1集) 太田 靖子

プログラムノート

1. ブラームス（1833-1897）はいうまでもなく、ドイツロマン派の大作曲家。日本の年代で言うと天保4年に生まれ、幕末から明治期にかけて活躍し、日清戦争のすぐ後明治30年に亡くなっている。シューマン、メンデルスゾーンたちドイツロマン派の中心的作曲家たちが幕末期に亡くなっているのと較べると、ちょうどその幕末期に活躍をはじめた世代になる。4つの交響曲をはじめ、室内楽、ピアノ曲、歌曲、合唱曲など多くの分野で重要な作品を残した。ただし、オペラなどの劇場作品には全く手を染めていない。合唱では名作《ドイツレクイエム》op.45をはじめ多くの伴奏付／無伴奏合唱曲を、歌曲ではシューベルト、シューマンに続くドイツ歌曲の中心的レパートリーを200曲以上作曲した。オペラの中で重唱曲を書いた作曲家は多いが、重唱曲集という形で出している人は少ない。しかしブラームスには、有名な四重唱曲《愛の歌》op.52をはじめとする四重唱の曲集が7つ、二重唱の曲集がop.28を含んで5つある。作品カタログに重唱曲集というカテゴリーのある大作曲家は、他にいないのではないだろうか？

《4つの二重唱》op.28は、1863年12月にウィーンで出版された曲集で、ヨアヒム夫人アマーリエに献呈されている。ヨアヒムはバイオリニストで、ブラームスのもっとも近い友人であった。第1曲と第2曲の初演は、出版された年1863年の12月18日、第3曲と第4曲はしばらく後で1869年3月5日となっている。作曲されたのはもう少し前で、第1曲と第4曲が1860年、第2曲と第3曲が1862年。ブラームスは、1862年の秋にハンブルグを離れ、ウィーンで生活するようになった。ちょうど、これをまたいだ時期の曲であり、20代の終わり頃に書かれた比較的初期のものである。ちなみに、《ドイツレクイエム》op.45（作曲1857-1868）、《愛の歌》op.52（1868）、《アルトラプソディー》op.53（1869）などが、ウィーンで落ち着いた30代半ばの作品である。

この二重唱は、アルトとバリトンというあまり例を見ない組み合わせで書かれている。献呈されたアマーリエ・ヨアヒムは、ブラームスの歌曲の歌手として知られたアルト歌手であった。この曲も彼女のために書かれたと考えたいところであるが、ブラームスがヨアヒム夫人アマーリエと知り合いになったのは、この4曲を書いたより後、1863年春のことであった。従って、アマーリエのために書いたのではない。この曲の作曲時期と出版・初演の時期のずれを考えると、特定の演奏家や特定の機会のために作曲されたものではないように思われる。

第1曲は、アイヒェンドルフ（1788-1857）の詩による。18世紀末から19

世紀のなかば過ぎまでヨーロッパの文化を席卷した「ロマンチズム」という風潮は、日本語で使われる「ロマンチック」なものに限らず、さまざまな様相をとって現れる。その一つの典型が、このアイヒェンドルフに代表される中世や超自然への傾倒であった。深い森と騎士、洞窟や荒れはてた古城、妖しい美女、といった世界がアイヒェンドルフのお定まりの道具立てである。この詩では、かつてはしかるべきお姫様であったことが想像される修道女のモノローグと、その幻聴・幻視としてあらわれる騎士のモノローグとが微妙に絡み合いながらすれ違って進む。最後は、魂の救済を神に願う修道女の祈りでむすばれる。

Die Nonne und der Ritter / Eichendorff

修道女と騎士 / アイヒェンドルフ

Da die Welt zur Ruh gegangen,
wacht mit Sternen mein Verlangen,
in der Kühle muß ich lauschen,
wie die Wellen unten rauschen!

〈女〉 あたりは寝静まる
わたしの情念は 星のまたたきと共に起きている
冷気の中 下でざわめく波の音に
わたしの耳はとらわれる！

Fernher mich die Wellen tragen,
die ans Land so traurig schlagen
unter deines Fensters Gitter,
Fraue, kennst du noch den Ritter?

〈男〉 そなたの格子窓の下
かくも悲しげにこの地を撃つ波が
遠方より私を運んで来た。
婦人よ、この騎士がおわかりか？

Ist's doch, als ob seltsam Stimmen
durch die lauen Lüfte schwimmen;
wieder hat's der Wind genommen,
ach, mein Herz ist so beklommen!

〈女〉 でも、生暖かい風を通して
不思議な声が聞こえてくるわ
また風が声を運び去った
ああ、胸がとても重苦しい！

Drüben liegt dein Schloß verfallen,
klagend in den öden Hallen,
aus dem Grund der Wald mich grüßte,
'swar, als ob ich sterben müßte.

〈男〉 朽ちはてたそなたの城は
荒れはてた広間を嘆いてあちらに横たわる
森がその地から私に挨拶した
まるで私が死なねばならぬと告げている様だった

Alte Klänge blühend schreiten;
wie aus lang versunknen Zeiten,
will mich Wehmut noch bescheiden,
und ich möcht von Herzen weinen.

〈女〉 長い間沈んでいた時から来るように
昔の音楽が 華やいでやって来る
私の憂いはさらに深くなるでしょう
そして心から泣きたくなる

Überm Walde blitzt's von weitem
wo um Christi Grab sie streiten;
dorthin will mein Schiff ich wenden,
da wird alles, alles enden!

〈男〉 森の上 遠く稲妻が光り
キリストの墓のまわり彼らは戦う
私はそこへ船を向ける
そこですべては終わる！

Geht ein Schiff, ein Mannstand drinnen,
falsche Nacht, verwirrst die Sinne!
Welt, ade! Gott woll bewahren,
die noch irr im Dunkeln fahren!

〈女〉 船が一艘 男を一人のせて行く
いつわりの夜が五感を狂わせているのだから！
世よさらば！暗闇の中未ださまよい行くものたちを
神がお護りくださいますように！

第2曲は、ドイツの古詩であるが、第4曲の詩人ファラースレーベンが編集した『16・17世紀のドイツ社会歌謡』(1844)からとったものと推定されている。夜這いをかける男と女のやりとりが、舞曲風の3拍子のリズムに乗って、軽妙に繰り広げられる。ちなみに、この詩には16世紀フランドルの大作曲家ラッソ(Orlando di Lasso, ca.1530-1594)が5声の多声リートとして作曲したのものが、こちらも軽妙な楽しい曲である。

Vor der Tür / Altdeutsch

戸の前で / ドイツ古詩

Tritt auf den Riegel von der Tür,
wie gern käm ich herein
um dich zu küssen.

〈男〉 開けて、開けて、戸のかんぬきを、
そしたら僕は喜んで中に入るんだけど、
君にキスするために。

Ich laß dich nicht herein!
schleich immer heim ganz sacht
auf deinen Füßen!

〈女〉 私はあなたを中に入れないうわ!
入れるものならそっと静かに入ればいいわ
あなたの足で!

Wohl kann ich schleichen,
sacht wie Mondenschein
steh nur auf und laß mich ein.

〈男〉 出来るさ、そっと入っていける、
月の光のようにね、
でも、起きて入れておくれ。

Das will ich von dir haben,
o Mägdlein, o Mägdlein,
dein'n Knaben laß ein!

〈男〉 僕は君に入れて欲しいんだ。
お嬢さん、お嬢さん、
君の彼氏を入れておくれ!

第3曲は、ドイツ文学の巨人ゲーテ(1749-1832)のSingspiel(音楽劇)《Jeri und Bäteli》(イエリとベテリ)からのテキスト。もっとも、1833年に出版されたゲーテの遺稿集では、『Lieder für Liebende』(恋人たちのための歌)としてまとめられた中にこの詩が収録されているので、ブラームスがどちらを参照して書いたかはわからない。ブラームスは、シューベルトやシューマンほどはゲーテの詩に作曲していない。偉大な先輩たちが皆作曲してしまったからだったのかもしれない。この曲、最初に女、次に男が、よく似たメロディーで、よく似た言葉を歌うが、その内容は全く反対を向いている。最後はカノンのような形でそれぞれの言葉とメロディーを二重唱するが、そのずれは最後まで埋まらない。

Es rauschet das Wasser / J. W. von Goethe

川は流れる / ゲーテ

Es rauschet das Wasser und bleibet nicht stehn;
gar lustig die Sterne am Himmel hingehn;
gar lustig die Wolken am Himmel hinziehn;
so rauschet die Liebe und fährt dahin.

〈女〉 サラサラと音を立て川は流れを止めず、
とても朗らかに星は空にめぐる、
とても楽しげに雲は空を行き、
同じようにザワめいて愛は走りすぎるの。

<p>Es rauschen die Wasser, die Wolken zergehn, 〈男〉 doch bleiben die Sterne, sie wandeln und gehn. So auch mit der Liebe, der treuen geschicht, sie wegt sich, sie regt sich, und ändert sich nicht.</p>	<p>川はさらさら流れ、雲は溶け去る、 しかし星は消えることなくめぐり行く。 忠実さに包まれた愛もまた、 動き、高ぶるが、変わることはないのだ。</p>
--	---

第4曲は、ファラースレーベン(1798-1874)の詩。ファラースレーベンは、ドイツ国歌に使われた詩を書いたことで知られる。この詩は1821年に出版された『Lieder und Romanzen』(歌謡とロマンス)からとられた。第2曲に似た民謡風の詩である。まず男が、「狩に行くから待っていておくれ」と恋人に向かって歌う、女の方は、「わたしは踊りあかしたいわ」と歌い、互いが主張しあって一緒に歌い、フィナーレを迎える。

**Der Jäger und sein Liebchen /
Fallerleben**

狩人と恋人 / ファラースレーベン

Ist nicht der Himmel so blau?
 Steh am Fenster und schau!
 Erst in der Nacht, spät in der Nacht
 komm ich heim von der Jagd!

〈男〉 空はこんなに青いじゃないか?
 窓辺に立って 外を見ていておくれ!
 夜になれば 夜更けになれば、
 僕が狩りから戻るから!

Anders hab ich gedacht,
 tanzen will ich die Nacht!
 bleib vor der Tür, spät vor der Tür
 willst du nicht tanzen mit mir!

〈女〉 私は違った考えだわ。
 夜を踊って過ごすの!
 戸口の前で立ってなさい。
 遅いのは私と踊る気がないってことよ!

Mädchen, der Himmel ist blau,
 bleib am Fenster und schau,
 bis in der Nacht, spät in der Nacht
 heim ich kehr, von der Jagd!

〈男〉 娘さん 空は青い、
 窓辺に残って見えておくれ
 夜になるまで、夜更けになれば
 僕が狩りから戻るから!

Ist auch der Himmel so blau,
 steh ich doch nimmer und schau,
 ob in der Nacht, spät in der Nacht
 heim du kehrst von der Jagd!

〈女〉 空がそんなに青いとしても
 私は決して眺めていたりはしないわ、
 夜の夜更けに
 あなたが狩りから戻ったとしても!

2. フォーレ(1845-1924)は、フランスの作曲家。ブラームスとの比較で言えば、ひとまわり(12歳)若く、弘化2年(黒船来航の8年前)に生まれ、ブラームスより28年長生きして、大正13年(関東大震災の次の年)に亡くなったということになる。明治・大正期の日本人があこがれたフランス文化の黄金期、象徴派の詩人ヴェルレーヌや印象派の画家モネの時代に活躍した作曲家であった。フランス音楽家の系譜の中では、サンサーンスの生徒で、ラヴェルの先生であり、その和声とメロディーにおいて20世紀初期の音楽

に大きな影響を与えたと言われる。なんといいても《レクイエム》op.48 (1887)がよく知られているが、作曲家としては第1に歌曲、次いでピアノと室内楽の作曲家として評価されている。彼の残した100曲ほどの歌曲は、フランス歌曲(ドイツのLiedに対しmelodieとよばれる)の金字塔と言われている。しかしその中で重唱曲は、たった3曲の二重唱曲だけ、2人のソプラノのためのop.10の2曲と、本日演奏するop.72の《黄金の涙》しかない。この曲の美しさを聞くと、どうしてもっと重唱曲を書いてくれなかったのかとくやまれる。

フォーレのピアノ曲の大半は、Nocturne(夜想曲)、Barcarolle(舟歌)、Impromptu(即興曲)のタイトルを持っていて、Nocturneであれば1番(1875年)から13番(1921年)というように番号で呼ばれている。本日の第3番は1883年に出版された初期の作品である。フォーレは比較的遅咲きで、40歳くらいまでの作品が「初期」に分類されている。フォーレの初期の曲には、彼独特の和音に彩られながら、チャーミングで軽い曲が多い。

続いて、フォーレの初期の代表的な歌曲を2曲。Au bord de l'eau《水のほとり》は1875年、Les berceaux《ゆりかご》は1879年の作品で、いずれも高踏派の詩人シュリー・プリュドーム(Sully Prudhomme, 1839-1907: 最初のノーベル文学賞受賞者)の詩に作曲された。《水のほとり》は、二人の恋人の変わらぬ愛を、《ゆりかご》は船乗りと残される女たちを歌う。

Au bord de l'eau / Sully Prudhomme

S'asseoir tous deux au bord du flot qui passe,
Le voir passer;
Tous deux, s'il glisse un nuage en l'espace,
Le voir glisser
A l'horizon s'il fume un toit de chaume,
Le voir fumer;
Aux alentours, si quelque fleur embaume,
S'en embaumer;
Entendre au pied du saule où leau murmure,
L'eau murmurer;
Ne pas sentir tant que ce rêve dure,
Le temps durer;
Mais n'apportant de passion profonde,
Qu'à s'adorer;
Sans nul souci des querelles du monde,
Les ignorer;
Et seuls tous deux devant tout ce qui lasse,
Sans se lasser;
Sentir l'amour devant tout ce qui passe,

水のほとり / シュリー・プリュドーム

過ぎゆく流れのほとりに
過ぎゆくを見ようと二人で座り
雲が空を行くのかと
二人で行くのを見
地平にわらぶき屋根が煙を立てるか
煙の立つのを見
あたりに何か花が香っているかと
香りをきき
水のざわめく柳のもとで
水のざわめきを聞き
この夢の続くほどには
時の過ぎゆくのを感じもせず
互いに愛し合うほかには
深い情熱をそそぐこともなく
世の争いには煩わされることもなく
心にとめず
倦み行くすべてのものを前にして
二人だけは倦むことを知らず
過ぎゆくすべてのものを前にして

Ne point passer!

この愛だけは過ぎ去らないと感じている

Les berceaux / Sully Prudhomme

Le long du quai, les grands vaisseaux,
Que la houle incline en silence,
Ne prennent pas garde aux berceaux,
Que la main des femmes balance.

Mais viendra le jour des adieux,
Car il faut que les femmes pleurent,
Et que les hommes curieux
Tentent les horizons qui leurent!

Et ce jour-là les grands vaisseaux,
Fuyant le port qui diminue,
Sentent leur masse retenue
par l'âme des lointains berceaux.

ゆりかご / シュリー・プリュドーム

波止場にもやった 大きな船が幾そうか
静かに 波のうねりに 身をまかせている
女たちの手が揺する
ゆりかごの記憶は忘れられ。

だが 別れの日はやって来る
涙し 悲しむのは女たち
好奇心の強い男たちは
水平線にあこがれ 乗り出す！

そのときが来て大きな船は
港を小さく遠ざかる
すると大きな力に引き止められるのを感じる
はるかな ゆりかごの魂に。

これらに対し、Pleur d'or《金の涙》は、1896年に書かれた中期の作品。フォーレの中期の歌曲では象徴派の詩人ヴェルレーヌの詩に作曲したもの、たとえばLa bonne chanson《やさしき歌》などが有名であるが、この曲は同じ象徴派の詩人でも、アルベール・サマン（Albert Samain, 1858-1900）の詩に作曲されている。フォーレがサマンの詩を知ったのは、当時彼の愛人であったエンマ・バルダク（後にドビュッシューの二人目の妻となった女性）の薦めによると言う。初演と出版は、いずれも作曲された1896年、ロンドンであった。同じ頃の中期歌曲に比して、重唱である分、フォーレ独特の和音の変化がより鮮明に現れて聴きやすい一曲になっているように思う。

Pleurs d'Or / Albert Samain

Larmes aux fleurs suspendues.
Larmes aux sources perdues
Aux mousses des rochers creux

Larmes d'Automne épandues.
Larmes de cor entendues
dans les grands bois, douloureux.

Larmes des cloches latines.
Carmélites, Feuillantines,
Voix de beffrois en ferveur,

Larmes des nuits étoilées,
Larmes des flûtes voilées.
Au bleu du parc endormi

金の涙 / アルベール・サマン

吊された花々に涙
岩のくぼみに苔むして
涸れた泉に涙

ふりそぐ秋の涙
悲しげな大きな森に
聞こえる角笛の涙

ラテンの鐘から涙
カルメル会、フォイヤン会の修道女たち
鐘楼からの熱い響き

星降る夜の涙
眠れる庭園の青さに
くぐもったフルートの涙

Larmes aux grands cils perlées,
Larmes d'amantes coulées
jusqu'à l'âme de l'ami

Larmes d'extase,
éplorement délicieux,

Tombez des nuits,
Tombez des fleurs,
Tombez des yeux!

真珠をちりばめた長いまつげに涙
彼の魂にまで流れ出す
恋人たちの涙

恍惚の涙
えも言われぬ悲嘆

夜から落ちよ
花々から落ちよ
その眼から落ちよ!

サプライズ！ ドリンクサービス券!!

1階入口脇の洋食屋「ガロ」にて、当演奏会
休憩時間のみに有効です。おかつろぎ下さい。

クラシック音楽の枠組みで、日本語の重唱曲というものは、たぶん、ほとんど書かれたことがない。オペラの中の重唱と、林光らの「ソング」とよばれる作品群に若干の重唱曲があるくらいだろう。しかし、重唱というジャンルは、歌と合唱の間に浮遊しているようなもので、垣根はそれほど高くない。ということで、現代の日本の歌曲を一瞥して、次いで合唱曲の重唱化の試みを。

3. 信長貴富（のぶなが たかとも 1971- ）は、いま、合唱界で大人気の若手作曲家。上智大学卒業。大学時代合唱団、卒業後も合唱団 OMP での数年間のアマチュア合唱の経験があり、《新しい歌》（2000）など多くの合唱曲を書いている他、歌曲、室内楽作品がある。この作品は2007年4月1日に行われた宮本益光のバリトン・リサイタルのために書かれた歌曲集《詩人の肖像》の第1曲。詩は中原中也（1907-1937）の未刊詩篇のもの。三善晃のいう「日本語の語りと歌い」という課題に、「語り」の斜面から挑んだ作品

になっている。

詩人は辛い / 中原中也

私はもう歌なぞ歌はない
誰が歌なぞ歌ふものか

みんな歌なぞ聞いてはあない
聴いてるやうなふりだけはする

みんなたゞ冷たい心を持つてゐて
歌なぞどうだつてかまはないのだ

それなのに聴いてるやうなふりはする
そして盛んに拍手を送る

拍手を送るからもう一つ歌はうとすると
もう沢山といった顔

私はもう歌なぞ歌はない
こんな御都合な世の中に歌なぞ歌はない

4. 三善 晃（みよし あきら 1933- ）は、若い頃から作曲を始め、東京大学文学部在学中にパリ国立音楽院に留学。現在では日本の作曲界の大御所的存在。《レクイエム》1972、《詩篇》1979、《響紋》1984 の合唱付きオーケストラ三部作をはじめオーケストラ曲、ピアノ曲を含む多くの室内楽曲、そしてさらに多くの合唱曲を書いている。歌曲集もいくつか書いているが、重唱曲というものはない。この曲は、1976 年テノールの酒井義長のために書かれた 5 曲の組曲の第 1 曲（原調 G、本日の演奏 F）。1960 年代のアバンギャルドの「狂躁」の後、三善が再評価されはじめた時代の曲。これだけでも曲として成り立ちうるような抒情的なピアノにつつまれて、萩原朔太郎（1886-1942）の初期の文語詩が歌われる。

ほほづき / 萩原朔太郎

ほほづきよ
ひとつ思いに泣けよかし
女のくちにふくまれて
男ごろのかなしさを*
さも忍び音に泣けよかし

*発表詩形では「さびしさを」

5. 寺嶋 陸也（てらしま りくや、1964- ）も、若手というにはすこし歳をとったが、合唱界で人気の作曲家、ピアニスト。東京芸術大学・同大学院の卒業。多くの合唱曲のほか、オペラシアター「こんにやく座」のためのオペラ、歌曲、ピアノ曲、室内楽曲、邦楽器のための作品などを書いている。ピアニストとしては、楽器、歌、合唱等の伴奏の他、こんにやく座など演劇関係のピアノで評価が高い。

《こどもの季節》という曲集は、林光（1931-）との協同作曲で作られた。帯広で50年も続いている児童詩誌「サイロ」の500号記念コンサート（2001年）のために、「サイロ」掲載のこどもの詩に合唱曲として作曲したものである。林光、寺嶋陸也が作曲したものの合計10曲を第1集としてまとめ、さらに寺嶋が2002年に「サイロ」掲載の他の詩に作曲した6曲を第2集として、2003年に出版された。

今日の演奏のために選んだのは、すべて寺嶋の作曲したもの。最初の《足》は、無伴奏の同声2部合唱、残りはピアノつきの同声2部合唱曲である。このような合唱曲を男声と女声の2重唱で歌う場合、通常高声側をオクターブ下げて男声が歌う。原曲の3度が6度に、4度が5度になるわけで、多くの場合は原曲の趣を大差なく表現できるが、曲によっては響きが不自然になる。また、和声的な曲では、一部に3声部が使われていたりするので、2人だけでその響きを再現するのは極めて難しい。今日演奏する6曲は、そのような問題がおこらないもの、というのを勘案して選んである。

技術的な話をしてしまったが、いずれも大変おもしろい詩なので、難しいことはぬきに楽しんでいただければ、幸いと思う。

（宮澤 彰，歌詞翻訳：宮澤 彰，宮澤 友子）

宮澤 友子

私は、歌うことが大好きで合唱団員になったアマチュアの音楽家です。これまでに、主に3人の合唱指揮者の指導を受けました。初めての先生は、就職後入部した旭硝子コーラス部の岸信介氏（大声で歌っても文句を言われなかったのが嬉しかった）。次が、女声合唱団アンサンブルミニョンとその後に続く合唱団 OMP の栗山文昭氏（合唱のいろはからプロとの仕事までいろいろ学んだ26年間でした）。そして3人目は今日一緒に歌っている宮澤彰氏（35年間、仲間で指揮者で、ブレない音楽学者です）。私のおさまりきらない声の面倒をみて下さった主な方々、石野健二氏、山内房子氏、大志万明子氏、そして現在の荻堂綾さんです。

宮澤 彰

学生時代から合唱を始める。東京大学柏葉会合唱団で学生指揮者。中世音楽合唱団、クール・ブリエール、東京オルフェオンに所属、合唱団 OMP で団内指揮者を17年つとめる。声楽を築地文夫氏、石野健二氏に師事。カトリック菊名教会聖歌隊指揮者。

長崎 麻里香

4歳よりピアノをはじめ、石橋礼子氏に師事。1995年東邦音楽大学総合芸術研究所、研究生として藤井一興氏に師事。1998年渡仏、パリ・エコール・ノルマル音楽院にてピアノをF・ジャキーノ、室内楽をD・エルリ、M・P・ソーマの各氏に師事し、ピアノ科コンサーティストディプロマ、室内楽科高等演奏家ディプロマをそれぞれ取得。その後1年間同音楽院研究課程に在籍。

2001年パリ国立高等音楽院に入学し、05年同音楽院ピアノ科を満場一致の最優秀の成績で卒業。この間、ピアノをM・ペロフ、E・ル・サージュ、D・パスカル、室内楽をI・ゴラン、T・パラスキヴェスコの各氏に師事。2005年帰国。

これまでに1999年フランス・プーランク国際ピアノコンクールにてプーランク作品優秀賞。2000年フランス、サン・ノム・ラ・プルティッシュ国際ピアノコンクールにて最年少優秀賞を受賞。パリ、サル・コルトーで行われたアフルレッド・コルトー記念演奏会に出演。日本とフランスを中心に欧米各地でソロ、室内楽、伴奏の活動を行っている。

Thanks to

川里 久雄

川里 洋子

萩堂 綾

松井 武臣

堀切 由美子

渡部 千賀子(ドイツ語指導)

鈴木 利一(表紙 絵)

アンサンブル ソラ
Ensemble Sol La l

at 鎌倉生涯学習センター